

チャペル週報

わたしがあなたがたを愛したように、
互いに愛し合いなさい。これが私の掟である。
(ヨハネによる福音書 15 : 12)



秋季宗教運動特集号
2005.10.17~10.21 No.16
関西学院宗教センター

チャペル・スケジュール

時間 10:35~11:05 場所 各学部チャペル

10月17日(月) 秋季大学キリスト教週間
上ヶ原キャンパス学部合同チャペル
ビデオ上映

於、中央講堂

10月18日(火) 上ヶ原キャンパス学部合同チャペル
ランバスチャペル・アワー

於、中央講堂

総 Ms.Lalita Pathela

10月19日(水) 上ヶ原キャンパス学部合同チャペル
インドネシア交流セミナー報告

於、中央講堂

理 大村 克己 (神戸三田キャンパス事務室課長)
総 Mark Bell(A.L.E)

10月20日(木) 秋季宗教運動大学合同チャペル(10:20~11:20)
西宮上ヶ原キャンパス
メッセージ: 李 沙羅 (韓国伝統舞踊家)

於、中央講堂

神戸三田キャンパス

メッセージ: 崔 忠植 (希望の家カトリック保育園長)

於、号館201号教室

10月21日(金) 秋季宗教運動大学合同チャペル(10:20~11:20)
西宮上ヶ原キャンパス
宣教師によるイングリッシュ・チャペル

於、中央講堂

神戸三田キャンパス

メッセージ: 李 沙羅 (韓国伝統舞踊家)

於、理工学部チャペル

ランバス早天祈祷会 毎金曜日 午前8:20~8:40 於、ランバス記念礼拝堂

10月20日(木) 秋季宗教運動のために

嶋村 誠

10月21日(金) 秋季宗教運動のために

森田 雅也

総合政策学部早天祈祷会 毎木曜日 午前8:40~

於、宗教主事室

隣人体験

秋季宗教運動・大学キリスト教週間への招き

学 辻

最初に「外国人」として生活したのは14年前、留学生としてスイスに滞在したときだった。日本とは違う環境で暮らすのは、もちろん楽しいことも多いのだが、いつもある種の不安につきまといられている感じがしたのも事実である。

言葉のことはもちろんだが、ちゃんと滞在許可がもらえるのか、適切な住居が見つかるか、病気になったらどの医者に行けばいいのか、というような細々とした不安が外国生活にはつきまとう。自分のように、いつかは帰国するという前提で滞在している場合ですらそうなのだから、仕事を見つけ、その土地に根づいて生活しようとする外国人であれば、その不安はどれほどだろうか。外国人であるゆえにアパートの賃借を断られたとか、学校や仕事で差別をされたというニュースに接すると、その弱い立場を多少なりとも経験しただけに、腹立たしい思いがする。

そのような不安にもかかわらず、自分が外国生活に良い印象を抱いて帰国できたのは、親身になって自分のことを心配し、助けてくれた人たちがいたからだった。その人たちから受けた「隣人愛」のおかげで私は、貧乏留学生の生活を最後まで続けることができたのである。

ルカ福音書10章にある「良きサマリア人の譬え」には、強盗に襲われて重傷を負った（おそらくユダヤ人の）旅人を助け、手厚く看護するサマリア人が描かれている。このサマリア人は、旅人が「外国人」、しかも歴史的に対立しているユダヤ人だということなど意に介さず、倒れているその姿を見て「断腸の想いに駆られ」（岩波訳。新共同訳は違う訳になっている）、身銭を切って助けるのである。危機に瀕した時に、思わぬ「隣人」を得たこの旅人がどれだけ嬉しかったか、私にはわかるような気がする。

私たちの身の回りにも、文化や民族を異にする人々が多く生活している。はたして私たちにはその人々の「隣人」になる備えがあるだろうか。日本の「国際性」は私たちの振舞いにかかっている。

今回の秋季宗教運動・大学キリスト教週間の主題は「隣人」である。「あなたも行って同じようにしなさい」（ルカ10章37節）というイエスの言葉に私たちはどう応えたらよいだろうか。共に考える機会としたい。

（商学部宗教主事）

「私と隣人」

李 沙 羅

今年度の関西学院大学の秋のキリスト教週間のタイトルは「隣人」です。隣人という言葉聞き皆さんは誰を連想しますか？「隣人」といえばよく「善いサマリア人」の箇所が用いられます。私にとって「隣人」とは、日本に住んでいる私の身近な人々だと思います。

私は、日本で生まれた在日韓国人3世です。在日が、自分たちに対する差別や偏見に満ちた社会において通名をもって生きていくしかない時代もあった中、私は両親の人権意識のおかげと差別や偏見をあまり感じない環境で育ったため、幼い頃より民族名の「李沙羅」という名前を使うことが当然だと思っていました。日本の学校に通いながらも韓国人としての誇りを持つことを意識して来ました。名前が3つもあると自慢する友人に対し幼心にも納得ができず、喧嘩をしたこともありました。

日本で生まれた韓国人であることに何の疑問も劣等感も感じていなかったのですが、やがて16歳になった時、指紋押捺という問題に直面しました。現在ではこの制度は違った形となりましたが、当時は、日本で生まれても、外国人は皆16歳になれば指紋を取られました。「日本人の友人たちと何ら変わらないのに、なぜ自分だけ犯罪者のように扱われてしまうのだろうか？」という疑問をもち、私は指紋押捺を拒否しました。その結果、韓国を訪問する際の再入国許可をなかなか出してもらえなかったこともありました。私には日本人と韓国人の隔ての中垣があることを思い知らされる経験となりました。

その後、活動の範囲が広がるにつれ、韓国人としての誇りをもとうとする

ことがとても面倒くさいことになりました。もはや日本には露骨な差別はなくなっているかのように思われますが、そうではないでしょう。北朝鮮による拉致問題が明るみになった時、朝鮮学校に通う子どもたちへの暴言・暴行が頻発しました。ある人は、「狂牛病の牛はみな朝鮮に持って行って、あいつらみんな殺してしまえばいい」と誰かが言っているのを聞いたそうです。

そのような差別・偏見から逃げてしまいたくなる私をいつも「踊り」が引き止めてくれた気がします。小学生の頃、韓国舞踊の公演を見たとき何か熱いものを感じ、舞踊を始めました。子どもだったので素直にすごいと思ったのでしょう。93年より創団された韓国伝統舞踊・柳会（ポドゥルフェ）のメンバーと共に公演活動や講師活動をするを通して、また他の在日の体験を聞き、様々なことを知り、共感しました。文化にはそれぞれ固有な違いはありますが、共感する心には国境がないことも知りました。

私は、とくに学校公演に行く時にいつも思うことがあります。それは、この子どもたちの中に韓国・朝鮮人であることを恥ずかしく感じ、嫌悪感をもっている在日の子どもがいるなら、また、韓国という国に魅力や関心がまったくない子どもがいるなら、「近くて遠い」といわれてきた「韓国」の踊りや演奏を通して何か感じてもらいたい、ということです。

「自分を愛するようにあなた方の隣人を愛せよ」この言葉を実践することは、とても難しいことですが、実現されるべきことであると感じます。この言葉が実現される社会は、「多民族・多文化の共生社会」が実現された社会だといえるでしょう。舞踊を通して、日韓の架け橋となって、私なりにそのような社会の実現に寄与できればと考えています。

（韓国伝統舞踊家）

キーワードは多文化共生

崔 忠 植

2006年ドイツでサッカーワールドカップが開かれる。さほど興味のなかったサッカーだったが、2002年歴史上初めてのアジアでの韓国・日本共催によるW杯が決定し、両国において白熱した試合が続き、家族で素晴らしいサッカーに取り付かれてしまった。特に韓国・日本の選手の頑張りには目を見張るものがあり、在日韓国人の私は両チームを応援し続けた。

球場の熱気、サポーターの応援の姿にも感動した。後で分ったことだが一連の全ての試合の裏方でボランティアの地道な活躍があったことに驚き、感嘆せざるを得なかった。

在日韓国人3世姜誠さんが『越境人たち六月の祭り』（集英社）2003年の暮れに出版した。ジャンルを問わず探究心と人間洞察の面で優れたノンフィクション作品を掘り起こして顕彰する「第1回開高健ノンフィクション賞」優秀賞に姜さんの作品が選ばれた。サッカーワールドカップを成功させるために、韓国、日本、中国、ブラジルなど30ヶ国550人の在日定住外国人ボランティアが組織され、18ヶ国の言語を駆使した。オールドカマー（日本生まれの韓国、中国～）ニューカマー（ブラジル、ペルー～）混成グループ（日本人との結婚）に大別できるが、統一した思いは越境人はグローバリゼーションとナショナリズムの落とし子であり国家の領域をまたいで生きることを意思表示した。

姜さんは「本のテーマは多文化共生と越境です。人はなぜ国境に分断され、生きなくてはならないのか。その不条理を問いたいと考えた」と話している。審査員の一人筑紫哲也氏は「単一民族神話にとらわれた社会に突きつけられた多文化共生の設問に人々が様々な反応を示す、そのモザイク模様が面白い」と評価する。

多田人権賞（人権活動に実績のある方）を在日朝鮮人3世辛淑玉さんが受

賞した。辛さんは人権抑圧に対して「在日」として多文化共生をめざして抗議行動を続けている。

東京大学姜尚中教授は、この作品は「悲しみと不幸な歴史を抱きしめて越境人は日韓の壁をまたぐ。新しい歴史のページがここに始まる。」と激賞している。

日本社会が多くの外国人の定住を余儀なくされている今日、（小さな政府で外国人を排除したい人々も多いが）、異民族、異文化との共生を志向せざるを得ない状況にあることです。幻想の単一民族国家観を執拗に主張し続ける日本人が余りにも多いのも事実だ。それが在日定住外国人に一切参政権を認めようとならないのもその現れだ。9.11の衆議院選挙で、朝まで結果を見届けている自分のイライラに腹立たしい。日本に住む私共にしても「この国はどこへ行こうとするのか」憂慮するばかり。義務を一方的に果たしながら権利は認めてもらえない。戦争を知らない人々がどんどん増えている。植民地支配の残虐性、戦争の犠牲者を蔑辱することなく、忘却もせず、反省の上に立って前進すべきでしょう。そのために多文化共生の社会づくりが不可欠なのです。サッカーワールドカップの歴史的な韓国・日本の共催の成功を軸に、かつての韓日の忌まわしい歴史を克服し、東アジア全体の平和の創造へとつき進んでいくことを願うばかりです。

虹は色の織りなす美しさ、色と色との間には少しづつ色が滲んでいる。その滲みには独特の色彩があり美しさがある。

単色の民族があり、滲みながらのダブルの民族があり、全体で多くの人々に美しさと調和をかもしだしている。これからの日本はダブルの子がどんどん増え続けていく。それは色とりどりの人間の絆だ。多文化共生を基台に人間の織りなす文化の新しい創造がある。

まさに、新しい社会のキーワードは多文化共生社会。

（希望の家カトリック保育園長）

教職員・学生有志による日曜礼拝

授業期間中の第2第4日曜日に一部英語を用いるバイリンガル形式で礼拝が行われています。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

10月23日(日)

午前10時～11時 関西学院会館ベーツチャペル

CDライブラリー

宗教センター事務室には教会音楽に関するCDを備えています。本学学生及び教職員であればどなたでも利用できますので、希望者は事務室までどうぞ。

使用済み切手収集にご協力ください

本学では、日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)切手部の活動に協力し、使用済み切手の収集をしています。記念切手、外国切手だけでなく、通常切手も対象としています。宗教センター常設の回収箱にお届けください。

秋学期の行事予定

秋季宗教運動 大学キリスト教週間 10月17日(月)～21日(金)

大学合同チャペル 10月20日(木)、21日(金)

学部合同アドベント・チャペル(上ヶ原) 11月25日(金)

アドベント礼拝 クリスマスツリー点灯 11月28日(月)

大学合同クリスマスチャペル 12月12日(月)

大阪梅田キャンパスクリスマス 12月14日(水)

関西学院クリスマス礼拝 音楽で祝う降誕

神戸三田キャンパス 12月 8日(木)

上ヶ原キャンパス 12月15日(木)

関西学院クリスマス at ザ・シンフォニーホール 12月20日(火)